

心を育てる学級経営 9月号
連続特集 補充学習に挑む

熊本市立出水南小学校教諭 村上浩一

① 单元通知表を実践してみても

1. 海浦ショック

今年1月に行われた、熊本は海浦小学校での「基礎学力保証研修会」に参加した。

その学校版ポートフォリオ「進潮」にこうある。「学力保証のためには、单元通知表という評価システムが必要である。」これは、次のように言い換えることができる、ということをここでは主張したい。

補充学習のためには、单元通知表という評価システムが必要である。

つまり、この单元通知表を私なりに実践追試した上での補充学習について、書いていくことにする。なお、この研修会では、单元通知表もさることながら、研修システムや時間割、向山型学習システムの採用等

等、しばらく「海浦ショック」が続いたものだった。

2. 单元通知表作成

海浦小学校長、吉永氏の著書『必達目標で学力保証のシステムをつくろう』（明治図書）や学校版ポートフォリオで紹介している型や内容を参考に、左ページのようなB4版（画用紙）の单元通知表（一部分）を自分なりに作成し、実践してみた。これは、年間を通して一人1枚で、国語科と算数科の全单元を網羅したものである。

この单元通知表を実践してみて、今まで我流で通してきた評価内容に見えないものがあったことが明らかとなった。そして、従来の評価観だと、どの程度を「よし」とするのか、きわめて曖昧なものがあり、自分の主観に頼るしかなかったものがあった。

例えば、次のようなものだ。

（今回）「全文を〇分〇秒以内で読むことができる。」
（従来）「。や、に気をつけて読める」「」の部分、気持ちを込めて読める」等々

「〇分以内で読める」という評価項目は、きわめて単純明解である。

3. 「〇分以内で読める」

このたった1つの文章で、指導観と評価観が変わった。これは、私の「読み」の評価のものさしを主観から時間に置き換えたことを意味する。つまり、時間という客観性が出てくることになる。確かに、「読み」の上手い子とそうでない子の差に、時間差があることは百も承知していた。しかしながら、この評価（吉永氏流に言う必達目標）には思い至らなかった。この評価事項を掲げたということは、この指導をしなればならないことを意味する。従来のような評価観とは決別するというのである。指導内容も理路整然としてくる。

この単元の教材を、○分以内で読めるか、読めないかである。

読めない子は、はっきりして来る。そう

すれば、次のような補充学習ができてくる。

●一斉読みの際、その子に寄り添い、文節
追い読みを何回も繰り返す。

●音読の際に、人指し指を添えて読ませる。

●ペアを組ませて、早く読む練習をさせる。

等々の学習ができてくる。

4. その効果はいかに？

ある子どもは、音読に標準の2、3倍かかっていた。その子に焦点を当て、上記のような補充学習をしていった結果、第一単元で標準タイムを数秒だけクリアすることができた。そして、その効果に驚いた。その効果とは。

今まで単元末のワークテストでは、ほぼ90点前後しかとれなかったのが、今回は何と90点をとることができたのである。

「○分以内に読める」という必達目標は、読解力をも高めるものである、ということに遅まきながら気づいた次第だった。

5. 表裏一体？

単元通知表と補充学習は表裏一体である。「○分以内に読める」という評価項目は、基礎学力であると同時に、裏返せば指導内容に直結し、そしてそれは補充学習へとつながっていく。何をどう補充すればいいのかということが明らかとなってくるのである。このシステムで教育を運用していけば、効果は絶大だと考える。

単元通知表は、何より「個」に焦点を当てたものだとと言える。「誰がどこまで理解しているのか」ということが一目瞭然になる。目標に到達していない子に、その目標が到達できるように、補充学習を行っていく。今までの行き当たりばったりの指導から脱皮を可能にしてくれるものであった。